

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

## 調査・研究活動(21号)

雑誌名	アジア・アフリカ文化研究所研究年報
巻	21
ページ	189-217
発行年	1986
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00011146/">http://id.nii.ac.jp/1060/00011146/</a>

# 調査・研究活動

## 中国の墓誌——唐代を中心に——

研究員 高橋 継 男

中国では、死者の事績などを記して石（或いは磚、金属）に刻した墓誌を墓中に入れ埋葬する風習があった。日比野丈夫氏によると、墓誌という名称は南朝宋に始まるが、後漢代、画像石の一部に付刻された死者に関する説明文が独立して別個の石に刻され、それが前身になって墓誌に発展したという<sup>(1)</sup>。墓誌の製作は北朝の北魏以降大いに流行し、唐代に至って最盛期をむかえたといわれる。

この墓誌には墓主の姓名、本貫、死亡及び埋葬時、年齢、官歴などの事績にとどまらず、一般に墓主の世系、婚姻関係、埋葬地なども詳細に記されており、当代の歴史資料として極めて高い史料価値を有している。もっとも墓主の事績の評価については殆どの場合肯定的であって、墓誌記事に全面的に依拠しようというわけではなく、またその他の事項に関しても誤謬があることもあり、批判的見地から史料として用いなければならないことは、他のいかなる文献史料の場合と同様である。

さて、これらの墓誌資料は、従来とて撰者個人の文集や集部総集類、金石関係資料などに数多く収録されてきたが、一九八〇年代に入って、左記のごとく唐代の墓誌資料集が相次いで新たに出版され、或いは刊行計画が

伝えられている。

(一) 饒宗頤編『唐宋墓誌・遠東学院藏拓片図録』中文大学出版社、香港、一九八一年

(二) 河南省文物研究所・河南省洛陽地区文管処編『千唐誌齋藏誌(上・下)』文物出版社、北京、一九八四年一月

(三) 毛漢光撰・盧建榮助理『唐代墓誌銘彙編附考(第一冊)』中央研究院歷史語言研究所、台北、一九八四年六月

同 右・耿慧玲助理『同 右(第二冊)』同 右、一九八五年一月

同 右『同 右(第三冊)』同 右、一九八五年五月  
同 右『同 右(第四冊)』同 右、一九八六年一月

(四) 国家文物局古文獻研究室編『解放後出土南北朝隋唐墓誌集』(仮題) 北京で計画中

(一)、(二)については既に吉岡真氏、池田温氏が紹介・批評を発表されており、(三)の一部についても池田温氏が触れられているが、近い将来、(四)とともに(三)が唐代墓誌の総合的基本資料集になると予想されるので、今回は主として(三)の史料的价值を概観し、今後の墓誌資料の活用に備えておきたい。

毛漢光氏が中心となって編纂を進めている『唐代墓誌銘彙編附考』(『彙編』と略記)は、第一・二冊の巻頭序文によれば、唐代墓誌の網羅的収録を意図し、編年排列して各冊に一〇〇点ずつ収め、全三〇数冊に及ぶ予定であるというから、完結時には全体として三千数百点の墓誌が収録されることになる。なお『彙編』刊行完了後、続編として『唐代墓誌銘註釈』、『唐代碑体字譜』、『唐代墓誌銘総目』の各書を編集出版する計画という。第

一冊の刊行後、完成まで一〇数年を要すると予想される、まさに大事業である。

『彙編』の構成は墓誌一点ごとに(A)釈文、(B)附記、(C)拓本がある場合はその写真が掲げられ、(B)附記は(1)碑誌の来源、(2)拓片の形制、(3)碑誌のその他の版本及び伝拓の経過、(4)別に神道碑・功德碑・行状等の有無、(5)碑誌主の正史中における列伝の有無、(6)世系、(7)碑誌の撰者・書者等、(8)碑誌を立てた年月及び死亡年月、(9)碑誌を立てた場所、(10)碑誌主の考証、(11)碑誌主の歴世時期、(12)婚姻関係、(13)異形の碑体字、(14)その他、の諸項目からなる。

本書は現在第四冊まで刊行され、「那盧氏夫人元買得誌開明元年（武德二年）（六一九）五月十六日」以下「樊寛誌顯慶五年（六六〇）二月十三日」に至る四〇〇点を収録しているが、本書の資料集としての特徴をうかがうため、採録墓誌の資料来源を一覧表にすると第1表のごとくである。

一見して明らかなように、本書は台北の国立中央研究院歴史語言研究所傳斯年圖書館（傳館と略記）<sup>(4)</sup>所蔵拓本を中心に編纂されていることがわかり、四〇〇点の資料来源中、その占める率は八四・五％にのぼる。ついで羅振玉編『芒洛冢墓遺文』の七％、台北の国立中央圖書館（中央館と略記）<sup>(5)</sup>所蔵拓本の三％が続く。なお『千唐誌齋藏誌』（『千唐』と略記）から第四冊で二点を採録しているにとどまっているのは、第三冊までの編纂の段階では『千唐』を参照できなかったためで、それ故、池田温氏も指摘されたように、第二冊では四点、第三冊では一点を『千唐』から補充することが可能であり、また参照した第四冊でも『千唐』一四四頁所収「辛驥墓誌銘顯慶四年十一月廿九日卒」<sup>(6)</sup>を失収している。

第1表

	I	II	III	IV	合計
傳館藏拓本	88	85	86	79	338
中央館藏拓本	2	6	3	1	12
全唐文	2				2
唐文拾遺(含統拾遺)	1	1		1	3
濟南金石志			1		1
關中金石文字存逸考	1				1
芒洛冢墓遺文	2	6	9	11	28
東都冢墓遺文		1			1
山右冢墓遺文				1	1
陝西金石志		1	1	1	3
漢魏南北朝墓誌集	1				1
考古學報	1			2	3
文物	1			2	3
西安郊区隋唐墓	1				1
千唐誌齋藏誌				2	2

ところで、『彙編』は少なくとも第四冊までは右のごとく収録墓誌の圧倒的多数を傳館所蔵拓本に依拠しているのであるが、このことは必ずしも、この多数の墓誌が傳館所蔵拓本でしか見ることができないということを意味してはいない。本書の附記の碑誌来源の項と『千唐』を参照して、傳館と中央館のみ所蔵している拓本と『千唐』との重複関係を調べると第2表のようになる。これによると、『彙編』刊行によって初めて公表された墓誌が八五点であること、これに『千唐』と重複する一三五点を合せた二二五点、即ち四〇〇点中五五％が従来の編纂資料集には未収録であること、『彙編』『千唐』両書の公刊により、唐初から顯慶五年二月までのものに限ると、公表された墓誌は従来の二倍強に増加したことがわかる。もっと

第2表

	I	II	III	IV	合計	400 点中の比率
傳館（或いは中央館）と『千唐』の重複	26	43	35	31	135	33.75%
傳館・中央館のみ所蔵	20	24	24	17	85	21.25%
( )は傳館のみ所蔵	( 8 )	( 3 )	(10)	( 3 )	(24)	(6.0%)

第3表

	年数	『彙編』	『彙編』未収 の『千唐』	『彙編』未収 の『北平目』	合計	1 年平均
武 德	9	9		1	10	1.1
貞 観	23	147	2	10	159	6.9
永 徽	6	131	3	5	139	23.2
顯慶元～5年2月13日		113	1	1	115	
( // ～4年)	(4)	(104)	(1)	(1)	(106)	26.5

も『千唐』及び傳館所蔵の唐後半期の墓誌拓本数は、高宗～玄宗期に比して激減する<sup>(7)</sup>一方、文集や総集類等に収録されている墓誌数は唐後半期に増加するように思われるので、将来完成した『彙編』全冊を通算すれば、唐代全体としては恐らく右の五五%の数字は、より小さくなるものと予測される。

さて、右に『彙編』の資料来源の項によって、傳館と中央館のみ所蔵している拓本と記したが、范騰編輯『国立北平図書館蔵碑目・墓誌類』(『北平目』と略記)で、『彙編』既刊四冊収録の墓誌について調査すると、若干数を除いて、傳館・中央館所蔵拓本の殆どが、かつての北平図書館にも所蔵されていた<sup>(9)</sup>ことが判明するだけでなく、『北平目』によって、いくつかの『彙編』未収墓誌拓本が存することが明らかとなる。『彙編』の冊数別にそれを示せば、第一冊では、「張□高墓誌武德五年二月廿四日」「隨北平襄公第七息段世弘墓誌貞觀五年十月十四日」「宜君県子張纂妻趙夫人墓誌貞觀六年五月廿九日」「隋太尉府典籤梁陟墓誌貞觀七年四月二日」「隨陽平郡発干県主簿郭提墓誌貞觀八年正月十二日」「從政郷君慕容墓誌貞觀九年二月六日」「李護墓誌貞觀十三年十一月廿九日」「処士李英墓誌貞觀十五年十月五日」「李仲賓墓誌並蓋貞觀十七年十月九日」「沢州參軍左法墓誌貞觀廿年三月廿日」の一〇点、第二冊では、「隋騎都尉司馬興殘墓誌貞觀廿年五月一日」の一点、第三冊では「処士程宝安墓誌永徽四年四月十五日」「左翊衛隊正甘朗墓誌永徽四年六月十六日」「象城県尉李果墓誌永徽五年十二月十九日」「洛州洛陽県姚義墓誌永徽六年八月廿三日」「張泉墓誌永徽六年十月十日」の五点、第四冊では、「飛騎尉張貞墓誌顯慶四年八月七日」の一点、合計一七点である。『彙編』収録墓誌四〇〇点<sup>(10)</sup>に、これら一七点及び『彙編』未収録の『千唐』の墓誌六点を合計して、年代と墓誌数の

関係を示せば第3表のごとくであり、永徽年間（六五〇～六五五）から格段に墓誌数が増加することが歴然としている。これ以降、特に唐中期から後期にかけて、この傾向がどのように推移するかは、今後刊行される『彙編』の続篇に注目したい。

なお『彙編』は、中華人民共和国の出版物に掲載された墓誌拓本の写真をも利用しているのであるが、その数は多くはない。それは、新中国成立後、一九八四年までの考古学関係の學術雑誌に発表された新出土の唐代墓誌は約四〇〇点（唐前半期約二〇〇、後半期約一六〇、不詳約四〇）にのぼるが、拓本写真が載せられることは必ずしも多くはなく、また釈文の公表も一部分である場合が少なくないためかも知れない。

また中国で多数の墓誌原石を収蔵している著名な機関は、河南省新安県鉄門鎮の千唐誌齋（約一千三〇〇余）、洛陽市の閔林廟内の洛陽古代芸術館（約一千）、開封市博物館（約六〇〇～七〇〇）であるが、これらと並んで陝西省博物館（西安碑林）は約八〇〇余点を所蔵しており、そのうち唐代のものは半数の約四〇〇、更にこのうち一九四九年以後出土したものが、約三〇〇（唐前半期約一二〇、後半期約一五〇、不詳約三〇）を数えるようである。<sup>(13)</sup> 前掲の編纂計画中と伝えられる『解放後出土南北朝隋唐墓誌集』には、新出土の誌目（或いは墓主名）のみ知られるものや、釈文の一部しか報告されていない墓誌が全文採録されるであろうと期待される。これが刊行されれば、『彙編』と合わせて、現段階で知りうる唐代墓誌のほぼ全貌が公表されることになるわけであって、両書の早期の刊行を切望したい。

以上、『彙編』の内容を紹介しながら、唐代墓誌を外面から概観してきた

が、従来容易には目にする事ができなかった唐代墓誌の全容の公表は、唐代史研究に極めて大きな恩恵を与えてくれるものと思われる。私もこれまで進めてきた唐後半期の巡院制研究に関して、管見の限り従来の伝存資料には現れない六つの巡院名を『千唐』収録の墓誌から見出すことができたが、<sup>(14)</sup> 当該研究にとって有用な墓誌二点が最近、出土発表されたので、これを簡単に紹介し本報告の結びとしたい。

その一つは、一九七〇年、江蘇省邗江県で出土した「唐塩鉄転運江淮留後勾檢官文林郎試太常寺協律郎騎都尉解君墓誌銘」<sup>(15)</sup> であって、墓主の解少卿（大暦五年（七七〇）生、大和九年（八三五）卒、六六歳）は、元和年間（八〇六～八一九）以来、殷公の下僚となり、殷公が明州刺史に転任した時、墓誌題目に記される官職を最後に退職したことが知られる。もう一つの墓誌は、江蘇省鎮江市で発掘された「……大夫使持節明州諸軍事守明州刺史上柱国陳郡殷府君墓誌銘」<sup>(16)</sup> であり、墓主の殷某（天宝八載（七四九）生、宝暦元年（八二五）卒、七七歳）の官歴が「解少卿墓誌」に見える殷公のそれと符号するから、この「殷府君墓誌」は、他ならぬ解少卿の上役である殷公その人の墓誌であることが判明する。ところで、この墓誌拓本写真は不鮮明で殷公の名は判読できないが、白居易「揚子留後殷彪授金州刺史兼侍御史（中略）三人同制」<sup>(17)</sup>『白氏文集』卷三一中書制詰一）によって、殷公は殷彪であると断定しうる。

即ち、この二つの墓誌に基づいて、殷彪は元和年間以降、知塩鉄転運嘉興監や転運判官、江淮地方における中心的巡院の揚子院長官である揚子（江淮）留後など、財政使職関係の官職を歴任し、しかも解少卿はその下僚として、一貫して殷彪に随従したことを知りうるのであって、これらの

墓誌は、当時の財政官僚及びその配下の実態の一斑をうかがい知る恰好の史料を提供してくれるのである。なお巡院の長官である知院官については、近いうちに発表を予定している拙稿で、これらの墓誌資料をも用いて詳論したいと考えている。

#### 注

- (1) 日比野丈夫「墓誌の起源について」(『江上波夫教授古稀記念論集』民族・文化篇) 山川出版社、一九七七年
- (2) 岑仲勉「貞石證史」(初出、一九三九年、のちに同『金石論叢』上海古籍出版社、一九八一年) 所収 七九～八一頁参照
- (3) 吉岡真「フランス極東学院蔵唐代墓誌拓本紹介」(『広島大学文学部紀要』四三、一九八三年)
- 池田温「批評・紹介『千唐誌齋藏誌』」(『東洋史研究』四四―三、一九八五年)
- なお吉岡氏には「『千唐誌齋藏誌』墓主人名索引稿」(『広島大学東洋史研究室報告』七、一九八五年) もある。
- (4) その目録として、毛漢光重編『中央研究院歴史語言研究所蔵歷代墓誌銘拓片目録附索引』(中央研究院歴史語言研究所、台北、一九八五年) がある。
- (5) その目録として、国立中央図書館編『国立中央図書館蔵墓誌拓片目録附索引』(国立編訳館中華叢書編審委員会、台北、一九七二年初版、一九八二年再版) がある。
- (6) 前註(4) 池田氏「批評・紹介」一四三～一四四頁参照。
- (7) 前註(4) 池田氏「批評・紹介」一三九～一四〇頁参照。
- (8) 初出、開明書店、一九四一年。最近、『石刻史料新編 第三輯』第三六冊(新文豐出版公司、台北、一九八六年) に所収。
- (9) 旧北平図書館所蔵墓誌拓本は、その後身である北京図書館に現在、所蔵されていると思われる。
- (10) この六点中、三点は『北平目』に見える。
- (11) 賀賀沢保規「中国新出石刻関係資料目録(1)―解放後より文革前まで―」(『同(2)―一九七二年より一九八二年まで―』)

調査・研究活動(中国の墓誌)

「同(3)―一九八三年より一九八四年まで―」(『書論』一八・二〇・二二、一九八二年・八四年・八六年) によって概算。

(12) 陳長安・宮大中『洛陽閼林(河南名勝古迹叢書)』(中州書畫社、一九八二年) 四五～四六頁参照。

(13) 陝西省博物館・李域淨・趙敏生・雷冰『西安碑林書法藝術』(陝西人民美術出版社、一九八三年) 所収「西安碑林藏石細目・墓誌」によって概算。

(14) 拙稿「唐後半期、度支使・塩鉄転運使系巡院名増補攷」(『東洋大学文学部紀要』三九(史学科篇XI) 一九八六年)

(15) 「揚州発現両座唐墓」(『文物』一九七三年五期) に拓本写真を掲載、のち「揚州出土唐人墓誌選輯」(『南京博物院集刊』三、一九八一年) に全釈文を採録。

(16) 鎮江博物館「江蘇鎮江唐墓」(『考古』一九八五年二期) に拓本写真を掲載。附記

例会で報告した後、富山大学の賀賀沢保規氏より中国における唐代墓誌の収蔵現況などについて教示をうけ、また明治大学の岡野誠氏より前註(12)(13)に掲げる書籍を提供していただいた。これらによって、報告時の発表内容に今回、加筆修正をほどこしたことを記するとともに、両氏に感謝の意を表する。

## 韓国の近代化と伝統的価値観（人口変動と地域社会における価値観）

### 調査

研究員	高橋 統一
研究員	清水 浩昭
研究員	松本 誠一

期間 八月十五日～九月三日

日本私学振興財団学術振興資金助成による研究所共同研究「韓国の近代化と伝統的価値観」の第一グループ（「人口変動と地域社会における価値観」研究を分担）として、伝統的価値観の担い手を老人層に求め、前記期間中にソウル、光州、全羅南道、大邱、慶尚北道などの地で調査を行なった。

韓国老人問題研究所の朴在侃所長（韓国老年学会会長）の助言と協力を得て、主に大韓老人会の本部および各地の支部に属する老人亭（敬老堂）を訪ね、支部および老人亭関係者より概況を聴取した。聴取に当たり、ソウルでは崔信徳教授（梨花女子大。社会学・人類学）、光州では崔在律教授（全南大。農村社会学）、大邱では柳時中教授（慶北大。社会学）の助言

と御協力を受けた。また、韓国政府の保健社会部や経済企画院調査統計局で老人亭や老年層に関する行政資料を、現代グループ（企業集団）の峨山社会福祉財団で老人問題等に関するシンポジウム報告書などの提供を受けた。各研究員による簡単な調査報告を『東洋大学海外研究調査報告書』にも寄せてある。

十二月十三日、研究例会で高橋研究員がスライドを用いて、旅行の内容と韓国老人層の概況を報告した。

今調査の実施に際しては、韓相福教授（ソウル大。人類学）、金龍澤氏（東洋大学院博士課程在学。老人福祉専攻）からも格別の御協力を得た。なお光州では、本学と関係の深い朴光淳教授（全南大。経済学）を通じて、国立光州博物館主催特設講座「韓日民俗信仰の比較」において、高橋研究員が「現代日本の村祭り——伝統と変化・日韓の比較」と題する講演を行なった。

沖縄・南西諸島における文化伝承過程に関する調査

研究員 針 生 清 人  
研究員 比 嘉 佑 典  
研究員 大 越 公 平

期 間 昭和六十一年十一月二十一日～二十六日

十一月二十一日、沖縄県立首里博物館見学。ついで、旧那覇市の中心壺屋地域の「シーサー」と「石敢当」を調査し、壺屋焼工場を見学した。

十一月二十二日～二十四日、伊良部島へ渡る。伊良部島国仲で前年度に引き続いて村落祭祀の変容をテーマとした研究調査を行った。昨年八月の調査では、人びとの話題にまったくのぼっていなかった国仲御嶽の改築が今年四月の総会で決定し、村落の人びとや那覇在住の出身者からの寄付も募り、七月には完成したという。総工費四〇〇万円ほどであったが、各世帯の負担は決して楽なものとはいえない。過疎化等の社会変動が激しいなかで、民間信仰が特定の宗教的職能者によってのみ担われているのではなく、人びとの生活に根ざし、新たな展開を示している事例を見ることができた。

十一月二十五日～二十六日、大越研究員は、来年度の調査研究に向けての準備のため、石垣市で博物館および図書館の文献資料を検索した。その結果、石垣島とその周辺の島々における村落祭祀に採用されている抽籤制についての研究を来年度より行う予定とした。

十一月二十五日～二十六日



針生・比嘉研究員は、本島北部名護市立博物館見学。今帰仁村の今帰仁城跡にある「ウタキ」(拝所)見学、読谷村からきたユタと出会う。御願の儀式を見学した。若い青年男女が御願に参加しているのを見て、若者の中にも、ウタキ信仰があることに関心をもった。

なお本調査実施にあたっては一部について日本私学振興財団学術振興資金の助成を得た。